

令和 8 年度第 3 回島田市文化芸術推進協議会 議事概要

1 日時 令和 8 年 10 月 7 日（水） 午後 1 時 00 分～午後 3 時 00 分

2 場所 島田市役所 203 会議室

3 出席者

(1) 委員 松本委員、森澤委員、高島委員、岡村委員、松永委員、榛葉委員、高橋委員、片川委員

(2) 事務局 文化振興課 野村課長、石間課長補佐、大野主事

(3) 傍聴者 1 名

4 概要

(1) 開会

(2) あいさつ

(3) 議事

○協議事項

第 2 期島田市文化芸術推進計画（案）について

(4) その他

委員の改選について

委員からの質問・意見は以下のとおり。

【協議事項】

ア 第 2 期島田市文化芸術推進計画（案）について

委員：16 ページ施策の柱と施策について。これ中川幾郎先生の 4 つの領域で書きましたので引用の注釈を入れる。で 17 ページから 4 文化政策の事業例というところが基本的には現在どのような事業をやっているかが書かれている。ここは基本的には市が力を入れているものを書いていく。事業例は、現状の事業例を掲載する。4 章見てください。ここに、今まではこういう風にしてきたけども、今後 7 年間こういうことをしますよと。いうことを書く。4 章、このタイトルがね、文化施設の役割となっているが、文化施設のことについては、少ししか触れていないので、例えば「芸術活動における今後の展開と文化施設の将来像」などというようなものにして、今後取り組んで行くことを書く。

委員の皆さんご意見お願いします。

- 委員：以前にも、ホールの話をしたが、大きいホールを作るのは無理であると思う。それなら廃校など要は人さえあればどこでも文化芸術活動の舞台になると思う。公民館や社会教育施設のような拠点があれば。そこに芸術家を呼んで公演をやるとか。使える施設を洗い出しして、小さいながらも大きいことをやっていると見せる。アートインレジデンスなど横にも繋げていくような。前向きに。ホールを作らないとかマイナスな表現ではなくて。
- 委員：文化ホールについては市民文化政策もあれば、都市文化政策、都市国の名物もあれば。地域文化政策もあれば、歴史文化政策でもある。
- 委員：吹奏楽の発表会とか団体系の音楽の発表会する場所も必要である。ただ近隣市と文化連携をするようなことは普段やってるのかもしれないが、近隣の施設の役割分担を考えることも必要である。
- 委員：子どもたちに色々なものに触れさせたいという思いがある。学校などにアーティストが来れば、やりたいという子が出てくるかもしれない。
- 委員：今東京とか大阪とか京都とよくあるのは、どっか子供が行くんじゃなくて、アーティストが学校というところに行く。アーティストが発表する。異文化的なアーティストという存在が学校に来ると子供も先生ばかりが大人じゃないんだって親と先生しか知らないから。そういうメリットがある。色々な生き方の人がいるんだとか。そういう効果は、将来大人になった時に、絶対なんか効いてくると思う。そういう意味で芸術家の派遣とかよくやってる。他に、ご意見はありますか。
- 委員：他の市の計画をみると、芸術家派遣や、子ども食堂での文化事業など行っている。
子供食堂は昔は栄養補給的な意味合いがあったが、今は人と接するのが苦手だとか、喋れないとか、いわゆるその心の問題とか。多様なものになってきてて、子供食堂っていうのは、もう多様な食堂の機能が出てきている。あともう一つ、その他の自治体でっていうところで行くと文化施設ではなく、いわゆる公民館とか地域の施設みたいなものがあるが、それを核として捉えて、文化芸術活動を行っているところが結構増えてきている。図書館と文化施設の連携がかなり盛んになっている。
- 委員：島田市は静岡市も近い。浜松のホールにも行けるし恵まれている。東京にも近い。日帰りもできる。
- 委員：幼い頃、公民館で演劇を見た記憶がある。何回かそのようなことを

経験して芸術に触れることができたと思う。

委員：子供の時原体験をさせるということは重要なこと。

委員：芸術家派遣事業と同じく芸術文化奨励賞が毎年授与されている。受賞者を活用した事業をもっと展開していくべきではないか。コンサートを開催するとか。今東京で仕事していても、地元に戻ってきて活動したい気持ちはあると思う。

委員：それはいろんな町に神主のいない小さい神社があり町の人が管理している。その町のお祭りを継続していくのは難しい理由の一つが町の子供たちが少なくなっていて、どんどん人口少なくなっているのです。担い手が少なくなっていることがある。もう一つ一番大きいのが、その町内自体がその神社の重要性を分かってないというかその街の昔の人がという思いで建てて、ずっと繋がってるんだよっていうのを理解してない。お祭りをやらないという町内も出てきている。

委員：地域文化政策のここに入れておいて。

委員：自治会とかと神社をだんだんこう切れ離すような動きがあるので、こういう政策の中にちょっとでも文字で入っていれば、まあ市がやってることだから、じゃあそのうちの町内も協力しましょうというような動きが出てくるのかもしれない。

委員：島田大祭などは、地域外の人にとってはなじみが薄いですが、学校などに祭の関係者が来てくれて話をしてくれると、そうするとメディアも来て、テレビで放映されてすごく話題になる。子どもたちがお祭りを見に行きたい、参加したいと思えば祭りの担い手になるきっかけになる。祭りも盛り上がる。有名な芸術家の方が来てくれるのも大事だし、地元のお祭りを体験できる機会を作ることでも大事である。

委員：島田は川留めの文化である。醤油にしても金谷までは薄口、島田は濃い口。もう一つは、がんもどき。東では「がんもどき」西は「ひりゅうず」大井川で東西に分かれる。

委員：金谷と島田の和菓子は違うですか。島田は和菓子屋さんがとても多い。和菓子屋さんめぐりとかそういうの出来る。

委員：第4章に関してですが、まず、施設を捉える時に、プラザおおりに限らず、茶室、図書館、博物館、さらに寺社これらの施設を活用していくんだという。歴史的建造物として捉え方でよい。施設の繋がりを作っていくという。皆さんのお話を聞いていると、市民の主体的な活動みたいなものが小さくはあるけれどもあって、それがなかなか大きな組織に至らなかったり、やりたい気持ちはあ

るけれども組織化することが大変であるとかという感じで地域コミュニティが衰退しているのかなと。そうするとやっぱり市民の主体的な活動とコミュニティの強化と文化施設が一体的になってこの計画を回していくと。それを支えるのが自治体の役割であると。前の計画を見ると、市民が真ん中であって、その主演に自治体があったり、企業があったり、こう観光があったりしていた。今日のお話を聞くと、この市民の力っていうのが少々弱くなってきてしまって、真ん中にあっても、放っておいてどうにかなるものではないので、これと文化施策と合わせて下から押し上げていくっていう押し上げる政策をやるんだっていうことをここになんか明記したらいいのかなっていうのも思いました。大きな柱となるのが教育機関との連携を教育委員会、自治会の連携を市民課とか市民協働課と強化して、市内の施設と市民活動の底上げっていうことをやっていく。そこプラス先ほどお話にあった、それを支える、支援する人がやっぱり今いないわけです。市民が何かやりたいと思ってもサポートしてくれる人がいないので、それをサポートできるオルマイティな人、例えば施設を所管している文化財団の所管の人がそういうことをしていくっていうのを明確にするとなんかいいのかなっていうのを今思ったところです。

第3章の第1の柱は、お話お伺いしていても他の柱と比べて弱いかなと思う。生まれとか育ちとか環境によらず、子供たちが平等に文化芸術を楽しむことができるっていう部分そこを明確に書いた方がいいのではないかな。熱心な家庭は東京や大阪に行って享受してるが、そうでない家庭は得られないということがあるので、全ての市内の子供がくらいの書き方をしてもいいと思う。オンラインとかゲームが溢れてて、そういう複製的なものにはみんなアクセスできると思う。しかし、生で音楽を聴いたり本物の芸術に触れることは、コスト面や環境面で動きな差が生じる。本物とかなんか特に現実との交流とか、生身のものとの交流をやっていきますっていうのを記載した方がいいと思う。また、お話を聞いていて、世代を超えた交流ということを皆さんはおっしゃってるかなと思った。むしろそこは、世代を超えてできるような文化活動の推進をする、というような方が、今は合ってるのかなと思った。

柱2では、お話を伺っていると市に資源はたくさんあるけれども、そのある資源を使いきれていない。やりたい気持ちはみんなあるのに活用できていない。人材発掘というよりは、地域の人材

とパートナーシップを築いていくという所に注力していくという方がよいのではないか。文面全体から、ネガティブ印象を受ける。市の魅力というのは、外から評価されるのではなくて、今あるものから浮き出るものなので、現状から浮き出すことが大切だと思う。

続いて柱3のとことは、コミュニティはどこの県でも衰退してるけど、郷土の文化資源を再発見していくそれこそがコミュニティを再構築する道だったということですよね。少し検索したら、この計画全体を通してコミュニティって言葉が結構少ないと感じた、他市ちょっと鬱陶しいぐらいコミュニティが見てやっぱり今文化芸術とかと地域コミュニティっていうのは結構切っても切れないところにある。コミュニティをどう活性化させるっていうことと、合わせて考えていく。伝統的な行事を維持するとかっていうのも同様だと思う。コミュニティを作っていくで、プラス歴史を語ってくれる人がいないっていうところで、他の地域でも観光資源のために語りを育成している。その人たちが語ることによって、地域の人々が自分たちの地域を再認識、再発見して、それが地域のアイデンティティになり、コミュニティの再構築につながる。

委員：その通り、語り部を作ることが観光ガイドの原点にもなるですよね。で、それが地域コミュニティ作りにも役立つし、かつ神社お寺の伝統的な催しの継承にもなる。やっぱりストーリーを語れる人がいないとお祭りにしても何をしているのか市民はわからない。語り部の育成を目指そう。それをどうしたらいいか。補助金を出すとか例えば有償ボランティアにするとか。そういうのはちょっと考えてい。観光協会との連携とか、そういう方の育成をしたり、ボランティアの登録をしたりして、その人たちが色々なところで活躍していることによって、知らない間に市民が島田市ってこういうことだったみたいに知っていくっていう感じ。その意味で、観光の領域との連携っていうのは大切である。

委員：柱4について、富山の世界遺産に行った時に、地元の高校生たちが観光ボランティアをしていて、その世界遺産を全部説明してくれた。それは何とも微笑ましく、素晴らしかった。それで興味を持って、話を聞いたら高校や中学の総合学習の時間で、地域のそういうところに行って、リサーチして、ガイドをやるっていうのがマストになってる。もうちょっとその学校教育と連携して、中高生の総合学習の場としての取り組み、歴史学習ですよね。そういう取り組みを計画に入れていくと、その最後4章に書く教育との連携を強化し

ていくっていうところに繋がると思う。

全体を通じて気になったところは、前回9個あった柱を今回は4つにすると、その背景をページの冒頭かどこかに記載した方が良い。

また、前回のものには諸団体とヒアリングしてそれを評価すると書いてある。今回はヒアリングに入るのかどうか分からないが、どこかに評価の部分を掲載しておく必要がある。

委員：柱を4つにしたのは、中川郁郎先生の理論にもとづくもの。これがわかりやすいと思う。前回の9の柱のなかには重複したような言葉があったので、整理したということ。

委員：9個の柱を建てたけれども、もう少し重点的に施策を展開していくために、整備しましたみたいな。つまり分散的に何でもかんでもやるのではなく、ある程度課題を明確にして、集中的に施策をやっていくということである。

委員：委員の皆さんからの意見を踏まえ事務局で修正をお願いします。次回は、11月2日13時から開催します。本日はありがとうございました。

午後3時00分終了